Introduction To Sumerian Grammar
シュメール語文法入門

Volume.I
書記法
音韻論
名詞と形容詞

Daniel A Foxvog
ダニエル A フォックスヴォグ

Translated by uyum
訳 ゆー

INTRODUCTION TO SUMERIAN GRAMMAR

DANIEL A FOXVOG

LECTURER IN ASSYRIOLOGY (RETIRED)

UNIVERSITY OF CALIFORNIA AT BERKELEY

Revised January 2016

Cuneiform Digital Library Preprints

<http://cdli.ucla.edu/?q=cuneiform-digital-library-preprints>

Hosted by the Cuneiform Digital Library Initiative (<http://cdli.ucla.edu>)

Editor: Bertrand Lafont (CNRS, Nanterre)

Number 2

Title: “Introduction to Sumerian Grammar”

Author: Daniel A. Foxvog

Posted to web: 4 January 2016

序文

Entia non sunt multiplicanda praeter necessitatem
必要が無いなら多くのものを定立してはならない。
オッカムのウィリアム

本書は、ここで書かれていない問題の詳細を解説し古代メソポタミアの言語と歴史についての補足的説明を提供できる講師の指導の元で学ぶ、大学初年度の学生のための文法書です。レッスンに付随していくつかの演習を用意しています。例題のために作文したものもいくらかありますが、多くは実際のテキストから引用したものです。必要に応じて本書の姉妹編である「シュメール語基礎用語集」[14] やオンラインの「ペンシルバニアシュメール語辞典」[11] のような最新の辞書を利用してください。この入門書を完了すれば、学生は楔形文字の学習とテキストの読解のための準備が整います。次に取り掛かるのはコンラッド・ヴォルクの「シュメール語読本」[39] がいいでしょう。

本書は、すでにある程度シュメール語を学び単純な王碑文を読んでいるようなひとにも有益かもしれません。従来の文法書よりも教育的実用性を重視し、豊富なテキスト図解の助けにより、文法をより構造的に説明しています。

かつての標準文法書であるマリー=ルイーズ・トムセンの「シュメール語」[13] の各セクション（§）に対し相互参照を記していますので、追加の情報やさらなる用例についてはそちらを参照してくださ

い。ディーツ・オットー・エッツァルトの「シュメール語文法」[10] ではより新しい修正の加わった文法体系となっています。最新の知見を概観するにはゴンザロ・ルビオの「シュメール語形態論」[36] がよいでしょう。パスカル・アッティンガーの「シュメール語入門」[1] は、非常に役立つ参考資料ですが、初心者にはお薦めしません。現在、アブラハム・H・ヤーゲルスマの革新的で記念碑的な著作「シュメール語の記述文法」[18] が Web からダウンロードできます。これはオックスフォード大学出版局からも出版予定です。本書で使用されているアッシリア学標準略語については、Web 上の CDLI（楔形文字デジタルライブラリイニシアチブ）の「アッシリア学略語」[6] を参照してください。学術オンライン辞書としてのスタンダードは、ペンシルバニアシュメール語辞典（ePSD）です。

ここで使用される、時代ごとの略語は次のとおりです。

OS	古シュメール期	紀元前 2500-2350
OAkk	古アッカド（サルゴン王朝）期	紀元前 2350-2150
UrIII	第三ウル王朝（新シュメール）期	紀元前 2150-2000
OB	古バビロニア期	紀元前 1900-1600

1990 年以前、UC バークレーで私が教えていたときのバージョンを所有している人からすれば、本書は大幅に拡張され、より包括的なものになっていることでしょう。大幅に改善されていて、おそらくは読み直す価値があるといえるはずです。形態論や動詞接頭辞の歴史的形態音韻論に対する私の説明は、まだ一般的とはいえず、やや型破りな少数派の位置づけに留まっています。ヤーゲルスマの新たな正書法と形態音韻論の規則に基づいた説明は現在特にヨーロッパで人気があり、最終的にはシュメール語の文法を学ぶ多くの学生の間で受け入れられるものになるかもしれません。

ともあれ、本書がこの文法書の最終更新版になります。

米国カリフォルニア州ガーンビル

2016 年 1 月

訳者序

本書はダニエル・フォックスヴォグのシュメール語入門の一部を翻訳したものです。

原書はアメリカのカリフォルニア大学バークレー校で長くシュメール語を教えていた著者が引退後に著したもので、2016 年にアッシリア学者や博物館学芸員からなる国際学術団体 CDLI（楔形文字デジタルライブラリーイニシアチブ）のプレプリントサーバでの公開という形で発表されたものです。紙の本としては 2014 年度版が Amazon などで販売されています。

訳者はゆーといいます。趣味で楔形文字文化に親しんでいるものです。シュメール語を学びたくて原著と出会い、勉強ついでに 2019 年ごろに個人的に翻訳していていました。もちろん許諾を得ていない勝手翻訳ですし、本来は公開するつもりのものではありませんでした。いつか最後まで訳し終えたらフォックスヴォグ先生に許諾を得て公開できたらいいなとは思っていましたが、途中で息切れしてしまってそのまま、というものです。

そのプレプリントサーバを運営している CDLI はもともと英オックスフォード大学のサーバを使っていたのですが 2022 年に独マックス・プランク人類史科学研究所に移管されました。このとき、プレプリントサーバに登録された文書がすべて CC-BY4.0DEED、すなわちクリエイティブ・コモンズの「表示 4.0 国際」とライセンス表記されるようになったのです。これは簡単にいえば「原資料への適切なクレ

ジット表記とライセンスへのリンクをつけていれば、自由に翻訳・改変・複製・再配布が可能」というものです。

このライセンスに則れば明示的に許諾を得なくても翻訳を公開できます。そこで改めて翻訳や体裁を見直して公開することにしました。この翻訳にも同様に CC BY 4.0 DEED ライセンスを適用するものとします。翻訳部分を利用する場合のライセンス表記は「ゆーによる翻訳 https://kurnugia.com クリエイティブ・コモンズ・ライセンス（表示 4.0 国際）」 または「Translated by uyum https://kurnugia.com Licensed under CC-BY 4.0」としてください。

2023 年 12 月に一度訳者のブログで第 3 課までを公開したところ、ご縁あって大学でシュメール語を学んでおられる hinoya さんのご協力を得ることができました。hinoya さんからは訳語の選択から原文の解釈にいたるまで全面的に多大なる助言をいただきました。大変感謝しております。

とはいえ、本書はあくまで勝手翻訳によるもので、原著者の監修や品質チェックを受けたものではありません。本書の誤りが訳者の責任にあることはいうまでもありませんが、真剣にシュメール語を学ぼうとするなら各記述については必ず原著にあたっていただければと思います。

翻訳の方針を案内します。

- 人名はカタカナで表記します。カタカナ化にはなるべく母国語での読みに近いもので一般的な表記を選びたいのですが、うまくいっていない例もあると思います。
- 文中で参照している文献について、書名は題意を翻訳して表し、巻末の文献一覧に原題や掲載誌を示しています。

- 専門用語（特に言語学用語）は初出の訳語に原語を添えて 音素 phoneme のように表記します。また、巻末に索引としてまとめています。
- シュメール語とその翻訳は `é-gal`《大きな家》のように、二重山括弧《》に訳語を入れて表記します。
- 翻訳は段落単位でなるべく日本語として読みやすいように直しています。

だいたいこんな感じです。不審な点や間違いを見つけた方はぜひご連絡いただければ幸いです。

楽しんでいただけますように。

ゆー

目次

序文 · · · iii
訳者序 · · · vii
第 1 課　シュメール語の書記法 · · · 1
I. 翻字の慣習 · · · 1
A. ダイアクリティカルマークとインデックス番号 · · · 1
B. 大文字と小文字、斜体、および括弧 · · · 4
C. 記号や語を繋ぐときの慣習 · · · 6
II. 書字の起源と進歩 · · · 10
用語 · · · 11
gunû と šeššig · · · 13
複合記号 · · · 14
多価性 · · · 18
限定符 · · · 18
判じ絵と音価 · · · 19
III. 正書法 · · · 20
表語文字 · · · 20
音節記号 · · · 21
限定符 · · · 22
シュメール語の語根の長い発音と短い発音 · · · 24
書記の方向 · · · 26
IV. 楔形文字を読む · · · 27

覚えていて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 28
第 2 課　音韻論・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 29
母音（§4-15）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 30
子音（§16-30）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32
閉鎖音・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32
音素/dr/・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 33
軟口蓋鼻音 /ĝ/・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 34
摩擦音・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 37
流音・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 38
強勢に関わる現象・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 39
覚えていて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 40
第 3 課　名詞と形容詞・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 41
名詞と複合語・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 41
ジェンダー（§37）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 43
数（§65-77）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 44
いくつかの例：・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 46
冠詞・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 46
形容詞 (§79-83)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 46
形容詞の形・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 46
tigi níĝ du_{10}(-ga) 構文・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 47
複数の形容詞・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 48
形容詞の重複・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 49
形容詞の翻字・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 51
覚えていて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 52
音節記号価表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 53
文献・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 55

索引 · 57

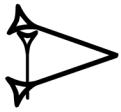
第 1 課　シュメール語の書記法

I. 翻字の慣習

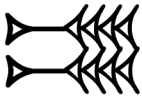
A. ダイアクリティカルマークとインデックス番号

シュメール語には、同音異義語が多数あります。たとえば次のような、同じ発音なのに意味が異なり、異なる 記号 (sign) で書かれる語があります。

/du/「来る、行く」



/du/「建てる」



/du/「離す」

実際のテキストにどの記号が書かれていたのかを正確に示すために、数字の添字をしたり母音の上にダイアクリティカルマークをつけて表します。R・ラバのアッカド語字典 [23] は今なお標準的な記号識別のリファレンスであり、何度も改訂され再版されています。Y・ローゼンガルテンの「ラガシュの前サルゴン期シュメール語文字目録」[25] も、古いシュメール語の文章を読むためには不可欠です。R・ボーガーの「アッシリア・バビロニア語文字目録」[3] は記号の読みとインデックス番号についての新しいリファレンスといえます。また古バビロニア期のシュメール語文献における最新の記号リストとしてはC・ミッテルマイヤーと P・アッティンガーの「古バビロニア期シュメール語テキストの記号リスト」[2] があります。

ボーガーの AbZ インデックスは次のように使われます。

#	単音節記号	複音節記号
1	du	muru
2	dú	múru
3	dù	mùru
4	du_4	$muru_4$

ダイアクリティカルマークは常に最初の母音に付記されます。

ラバなど古い記号リストにおける複数音節記号の表記にはいくつか

バリエーションがあります。ラバの記号リストの最初の版を見てみましょう。古い本ですが、図書館でまだ出会うことがあるかもしれません。この版でラバは複数音節記号の最初の音節にアキュートアクセントとグラーブアクセントを移すことでインデックス番号 4-5 を表していました。

murú（= $\mathtt{muru}_2$）

murù（= $\mathtt{muru}_3$）

múru（= $\mathtt{muru}_4$）

mùru（= $\mathtt{muru}_5$）

これは、長短の音価を持ついくつもの記号で問題になります。たとえば、記号 `túk` は/tuk/または/tuku/と読むことができます。ラバは後者に `túku` という読みを与えましたが、これは $\mathtt{tuku}_4$ ではなく、$\mathtt{tuku}_2$ を表します。つまり、`túk(u)` というわけです。より新しい版のラバや、本書で採用しているボーガーの体系では、ダイアクリティカルマークを常に複数音節記号の最初の音節に配置し、インデックス番号 2 および 3 にのみ使用することとしています。

一般に受け入れられているインデックス番号がまだ存在しない発音、発音の新しい値には、「x」の添え字が与えられます。たとえば《横》を意味する $\mathtt{da}_\mathtt{x}$ です。

なお近年ではグラーブアクセントとアキュートアクセントを完全に捨て去り、すべての場合に数字の添字を使うことが増えてきています。たとえば新しいペンシルバニアシュメール語辞書の規則では `du`、$\mathtt{du}_2$、$\mathtt{du}_3$、$\mathtt{du}_4$ などと表記することになっています。とはいえ、アクセントの使用はシュメール語の文献ではまだ現役で、初心者がそれに慣れるのは非常に重要であるため、本書では残しておくことにしましょう。

B. 大文字と小文字、斜体、および括弧

シュメール語だけが書かれている文脈では、シュメール語は通常小文字のローマ字で書かれています。大文字が使われるのは次のような場合です。

1) **記号の正確な意味が不明または不確かな場合**
多くの記号は多価です。つまり、複数の意味または読みがあります。記号の特定の読みが疑わしい場合、最も一般的な読みを選択し、大文字でこれを書くことにより、この疑いを示すことができます。たとえば、KA-g̃u$_{10}$ ma-gig《私の KA は私を傷つけます》という文では、何らかの身体の部分が意図されています。しかし、KA という記号は ka《口》、kìri《鼻》または zú《歯》と読むことができ、文脈からはどの部分を指すのか明確になりません。ここで KA と書くことにより、読者に特定の読み方を指定することなしに、この記号を指し示すことができます。

2) **記号の正確な発音が不明または不確かな場合**
たとえば、a-SIS《汽水》というフレーズは、2 番目の記号の発音は ses または sis のいずれかとされていますが、まだ確定されていません。このような場合に大文字を使用することで、誤った選択をすることなく読者に選択肢があることを伝えることができます。

3) **標準的でない記号または「x」値を指示したい場合**
この場合、x 値の直後に、たとえば da$_{x}$（Á）のようにその記号の既知の標準値を大文字で括弧にいれて表記します。

4) **複合表語文字の綴りを示したい場合**
たとえば énsi（PA.TE.SI）《領主》または ugnim（KI.KUŠ.LU.ÚB.G̃AR）

《軍団》のように。

5) **記号そのものを指し示す場合**

たとえば「ŠU の記号は手の象形です」のように。

アッカド語や、複数の言語を混ぜ書きする場合には、この他にさまざまな慣習が存在します。最も基本的な慣習は、アッカド語の語は小文字のローマ字またはイタリック文字で書かれ、シュメール語の文字は大文字で書かれるというものです。たとえば a-na É.GAL-šu 《彼の宮殿へ》のようにです。いくつかの文献では、アッカド語と同様に小文字や斜体で書きながら、一字ごとに空白を開けることでシュメール語を表すものも見受けられます。また最近の文献では、シュメール語を太字で表記するものもあるようです。

限定符、つまり意味を示すための発音されない指標は、シュメール語のテキストでは上付きの添字で ^{giš}haŝhur と、あるいはアッカド語の場合はしばしば大文字で同じ行に ĜIŠ.HAŠHUR と表記されます。また、ピリオドで区切った小文字で ĝiš.haŝhur と書かれていることもあります。

記号の破損には角括弧を使用して、部分的な破損は lu[gal]、完全に欠落している場合は [lugal] のように書き表します。記号の部分的な欠損を示す際に半括弧を使用することもあります。古代の筆記者によって省略されたと思われる記号は、<角括弧>の使用によって示されますが、誤って繰り返されている記号を現代の編集者が除去したものは、《二重角括弧》によって示されます。

C. 記号や語を繋ぐときの慣習

ハイフンとピリオド

アッカド語のテキストでは、アッカド語の翻字には常にハイフンが使用されますが、シュメール語由来の語や文字記号はピリオドで区切って表記します。シュメール語のテキストでは、ピリオドは大文字で記述された複合記号の要素に使用し、それ以外はハイフンで区切ります。

énsi(PA.TE.SI) 《領主》

^{kuš}gur$_{21}$(É.ÍB)^{ùr} 《盾》

an-šè 《天へ》

ただし、シュメール語の特徴である連鎖構造をどのように表記するかについて慣習をまとめるのは簡単ではありません。私たちはいまだシュメール語の語というものを正式に定義できてはいません。（詳しくはブラック「シュメール語の語彙分類」[5] またはカニンガム「シュメール語単語クラス再考」[9] を参照してください）したがって、私たちはシュメール語を記号ごとに翻字するのみで、「語」を転写しているのではありません。動詞連鎖（verbalchain）は、語幹と接辞が連なって一つの単位を構成します。しかし、名詞連鎖（名詞句）は、主要部名詞（headnoun）と接尾辞に加え、形容詞、同格、従属属格構文、関係節で構成されることが多く、シュメール語だけの文脈で名詞連鎖をどこで区切るかは、個々の学者の習慣と訓練によって変わります。目安の一つは、連鎖が長くなりすぎるようならどこかで区切るというものです。普通、表示の明確さが主要な基準となります。

通常、一般的な複合名詞や固有名詞の構成要素はハイフンで繋ぎ

ます。

dub-sar《粘土板　書き手》=《書記》

an-ki《天と地》

en-mete-na 《エンメテナ (王)》

形容詞は、以前はそれが修飾する語と結合されていましたが、現在、ほとんどの学者は形容詞を別の語として書きます。

dumu-tur または dumu tur 《子供 小さい》 =《小さな子供》

動形容詞（過去分詞）もハイフンで繋ぐことは少なくなりました。
verbal adjective

é-dù-a または é dù-a《家 建てられた》=《建てられた家》

属格構文の二つの部分は、複合名詞の構成要素でない限り、今日では結合されていません。

é lugal-la《王の家》 {é lugal + ak}

zà-mu 《年の端=新年》 {zà mu + ak}

なお、広く受け入れられている方法論がない場合、シュメール語の意味の単位をどのように組み立てるかについては、自分自身の感性を研ぎ澄ますことで対処しなくてはなりません。これらの慣習の目的は、それらの間の関係を明確にし、言語の視覚的表現を補助することにあります。シュメール語の書記体系自体にはそのような結びつきはなく、いかなる種類の句読点も使用されていません。大事なのは、優れた学者たちの普段の実践を手本とすること、そして一貫性を保つことです。

+符号と × 符号による記号記述

ある記号が別の記号の内側（または特に古いテキストでは上または下）に書かれていることを示す際、ベースとなる記号と追加される記号を「×」で区切った大文字の名前で表記します。

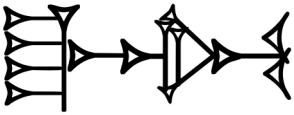
KA×A 口 × 水 = naĝ《飲む》

記号の読みや発音が不明である場合、こうして作られた名前が読みが定まるまでの間の標準的な翻字として使われます。

IRI×A 街 × 水 =《IRI×A 市》

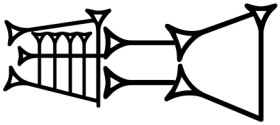
合字 とは、二つの記号が近接して一緒に繋がっていることを指します。特に、それら二つの記号が、一つ以上の筆画を共に共有しているときや近接して置かれた結果いくらか特徴を失ってしまった時に、合字と呼ばれます。構成要素の順序が逆転した、古風な特徴を持つ記号も、合字と呼ばれます。合字のそれぞれの部分は、伝統的に+でつなげて表記されますが、一部の学者はピリオドも使用します。
ligature

GAL+LÚ 大きい＋男 = lugal《王》

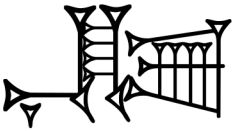


GAL+UŠUM 大きい＋蛇 = ušumgal《ドラゴン》

SÌG+UZU たたく＋肉 = túd《打つ、鞭》



ZU+AB = abzu 《(神話上の) 地下の海、深淵》



EN+ZU = suen《スエン (月神)》

より複雑な複合記号では、括弧でくくられた複数の要素をつなげて表記される場合もあります。

DAG+KISIM$_5$×(UDU.MÁŠ) = amaš 《羊の囲い》

コロン

記号の順序が後の時代ほど固定されていない古い時代のテキストでは、コロンを使用することで実際の文章ではコロンの両側の記号の順序が逆であることを読者に伝えることができます。たとえば通常の za-gìn《ラピスラズリ》の代わりに GÌN-ZA と書かれていることを za：gìn と表記して示します。複数のコロンを使用して、記号の適切な順序が不明であることを示すこともできます。したがって、たとえば ba：bi：bu と翻字されている場合、「どの記号が最初に来るのか、2 番目に来るのか、3 番目に来るのかわからない！」という意味になります。

II. 書字の起源と進歩

D. シュマント=ベッセラは、古代オリエント全体で長い間使用されてきた計数トークンによるシステムから楔形文字への急激な発達が、

4 千年紀の終わりごろにあったことを実証しました。私たちの知る最も古いテキストは、ウルク第 IV 層 a（紀元前 3100 年頃）から発掘された象形文字の書かれた粘土板です。他の初期王朝時代のテキストは、ウルクのより後期の層や、ジェムデト・ナスル、およびウル（第 1 王朝、紀元前 2700 年頃）から発掘されたものです。これらの古い文書については、最近になって多くの進捗があるものの、その多くはまだ解読できていません。紀元前 2600 年ごろになると表語文字と音節文字を混合した書記法が生まれ、テキストはほぼ完全に理解可能になります。

用語

「象形文字（pictogram）」とは古い時代のテキストに見られる記号のことで、尖った葦筆で粘土に描かれた「絵」によるものだということを指しています。また「表意文字（ideogram）」または「表語文字（logogram）」とは、「概念」や「語」を表す記号のことです。現代のシュメール学者は表語文字の用語を使用しています。

初期の書字系は、具体的な物体を描いた記号だけで形成されていました。物体全体を描写している場合もありますし

kur 《山》

šu 《手》

še 《麦（の穂)》

または物体の重要な部分を描いている場合もあります：

gudr 《牡牛》

áb 《牝牛》

その他、これらの記号はもう少し抽象的ですが、それでも何が描かれているかは明確です：

a 《水》

ĝi$_6$ 《夜》

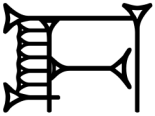
その他、抽象的すぎるか、具体的かつ詳細すぎるため、まだ識別できていない記号がたくさんあります。古テキストの特徴である細分化された多数の記号は、記号と対象の間に 1 対 1 の対応を作り出す試みがなされたことを示唆しています。このシステムがすぐに扱いにくくなったであろうことは明白ですし、さらにいえば抽象的な概念や手続きを表現することは難しかったでしょう。そのため、記号を生成する別の方法が生まれました。

gunû と šeššig

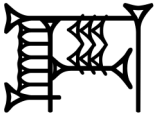
新しい記号を生成する一つの方法は、基礎となる記号の一部に目印をつけて対象を指定することでした。この目印を、アッカド人の書記は斜線 gunû（シュメール語の gùn-a《色付きの、装飾された》に由来する）および網掛け šeššig（穀物の記号 še の初期の形に似ているため）と呼んでいました。次のような二つの記号を比較してみましょう。

SAĜ

KA



DA



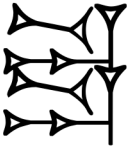
Á

最初のセットでは、基本となる記号は saĝ《頭》です。この口の部分に斜線を加えることで SAĜ-gunû を作り出し、これを KA《口》と読みます。2 番目のセットでは、ベース記号は da 《横》（つまり、肩、腕、および手）です。この腕の部分に網掛けを加えて DA-šeššig をつくり、これを á《腕》と読みます。

複合記号

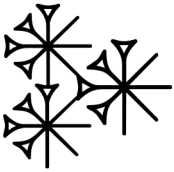
二つ以上の記号を組み合わせて新しい記号をつくることも行われました。

1）同じ記号を二重または三重にしたもの



DU
DU

＝ su_8(b) 《来る、行く（複数)》、動詞 du《来る、行く》の未完了複数形



AN
AN
AN

＝ mul 《星》AN はもともと星を描いたものだったが、後に an《天》または diĝir《神》を意味するようになった

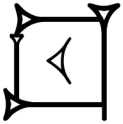
2）二つ（またはそれ以上）の異なる記号を用いて、概念を組み合わせることで、新たな概念を表したもの

KA×A 口+水 ＝ naĝ《飲む》

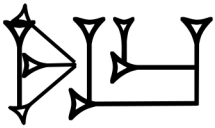
KA×NINDA 口+パン = gu_7 《食べる》

A+AN 水+天 = šèĝ 《雨》

NÍĜIN×A 囲い+水 = ambar 《湿地》



NÍĜIN×BÙR 囲い+穴 = pú 《井戸》

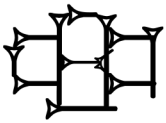


MUNUS+UR 女+犬= nig 《雌犬》

3）基本となる記号に、関連した意味の語の発音を指示する表音文字を追加したもの

KA×ME 口+<u>me</u> = eme 《舌》

KA×NUN 口+<u>nun</u> = nundum 《唇》



EZEN×BAD 壁+ <u>bad</u> = bàd 《都市の城壁》

UD.ZÚ.BAR 太陽 + <u>zubar</u> = zubar / zabar 《青銅》

多価性

最も重要な進歩は 多 価 の原則であり、特定の記号が、近い意味と個別の発音を持つ多くの言葉と関連づけされたという点です。これは、新たな表語的な価値を生み出す非常に便利で簡単な方法になりました。
polyvalency

たとえば：

apin 《鋤》は uru_4 《耕す》や engar《農夫》、àbsin《溝》とも読むようになりました。

ka《口》は kìri《鼻》や zú《歯》、inim《言葉》とも読むようになりました。

pa《枝》は ĝidri《杖》 sìg《たたく》、ugula《親方》とも読むようになりました。

utu 太陽は ud 《光、日、時間》 babbar 《輝き、白》、àh《乾いた、枯れた》とも読むようになりました.

an《空》は diĝir《神、女神、神性》とも読むようになりました。

限定符

多価記号について、書き手の意図したものがどの値かを読者が判断するのを助けるために、 限 定 符 の用法が生まれました。限定符とは、記号や記号グループの前後に配置された場合に、対象が特定のカテゴリに属していることを示すものです。木、葦、銅または青銅の物体、あるいは人、神、場所などを表します。ウル第三王朝期（2114-2004）までは、限定符の使用は基本的に書き手の自由でしたが、シュメール語が話し言葉としては死語になるころには、それらは義務になりました。限定符は、テキストが読まれたときに発音されな
determinitive

いものだったはずです。それらが語の一部ではないことを示すために、少なくともシュメール語のみの文脈では上付きの添字で翻字します。上記の「鋤」記号を例にすると、多価記号 APIN の読み方は次のようになります。

apin-「木」限定符が先行する場合：^{giš}apin《鋤》

engar-「人」限定符が先行する場合：^{lú}engar《農夫》

その他、uru$_4$《耕す》または àbsin《溝》は文脈から判断します。

判じ絵と音価

ある時、簡単に描ける物体の記号を借用して、簡単に描くことができない同音語、特に抽象的な概念を書くというアイデアが生まれました。これを現代では判じ絵と呼びます。たとえば、/ti/と発音される矢印の絵は、ti《肋骨》や ti(l)《生きる》を示すためにも使われるようになったのです。判じ絵の原則の採用は大きな革新でしたが、シュメール語の書記体系を学ぶことの難しさを増しました。なぜなら、こうして書かれた言葉の意味は、元の基本的な形や記号の意味から完全に掛け離れているからです。

判じ絵の応用により、純粋に音節や音韻を示すために記号を使うことも可能になりました。たとえば、表語文字である mu《名前》や ga《乳》を使用して、動詞の接頭辞 mu-《こちらへ、外へ》や ga-《〜したい》といった文法要素を書くことで、文の中の関係性を表すことができるようになったのです。音価を扱えるようになったことで、あらゆる単語を音価で綴ることも可能になりました。これは、適切なシュメール語の表語文字が存在しない外国の借用語を扱う場合に特に便利です。

最終的には、約 90 個程度の母音 (V)、子音 (C)-母音 (V)、および母

音 (V)-子音 (C) に集約された音価集合がアッカド語書記法の基礎を形成しました。これらの音価はアッカド語の音素目録で使われるシュメール語と異なる音を表すためにいくらか修正され、また多くの新しい音価、さらには複音節音価（CVC、VCV、CVCV）を生み出すために拡張されていきました。

こうして出来上がったシュメール・アッカド語の書記体系は、西暦 1 世紀の終わりごろにいたってもまだ一部で使用されていました。最後に知られているテキストは、天文学に関する西暦 76 年の日付のものです。このように、この体系は 3200 年以上にわたってメソポタミア文明のニーズに応えてきました。これは人類史における特筆すべき実績といえます。

III. 正書法

完成された書記法では、表語文字（語を表す記号）、音節文字（単語記号から派生して音を表す記号）、および限定符（読み手が多価記号のさまざまな値から選択するのに役立つ、発音されない記号）を使用して、話し言葉を再現します。現在、このような書字法をロゴフォネティックまたはロゴシラビックと呼ぶ人もいます。

表語文字

多くのシュメール語の表語文字は、「水」などの単一記号で書かれています。他の文字には、概念を表す二つ以上の記号を組み合わせて新しい概念を表します。その結果、複合記号または記号複合体は、その部分の発音とは異なる発音を持ちます。

KA_xA > naĝ 《飲む》（KA 《唇》と A《水》の組み合わせ）

Á.KALAG > usu 《力》(Á《腕》と KALAG《強い》の組み合わせ)

このような複合文字は、次のような二つ以上の表語文字で構成される複合語とは区別されます。

kù-babbar 《銀》(文字通りには「白い貴金属」)

kù-sig$_{17}$ 《金》 (文字通りには「黄色い貴金属」)

ur-mah 《ライオン》 (文字通りには「偉大な肉食獣」)

za-dím 《宝石細工師》(文字通りには「石を飾る人」)

表語文字は、シュメール語では名詞や動詞の語根や語を書くために使用され、アッカド語では、音節文字を使用して綴らなければならないアッカド語の記述における一種の速記法として使用されます。たとえば、アッカド人の書記は、「王は彼の宮殿に来ました」という文を šar-ru-um a-na e-ka-al-li-šu il-li-kam と、完全に音節的に書くこともできます。ですが、彼は「王」と「宮殿」にシュメール語の基本的な表語文字を使用して LUGAL a-na É.GAL-šu il-li-kam と書くことでしょう。

音節記号

音節記号は、シュメール語では主に文法要素を書くために使用されます。また、適切な文字が存在しない語を書くためにもよく使用されます。この音声表記は、問題の語が外国の借用語であるという手がかりになる場合があります。たとえば sa-tu はアッカド語の šadû《山》から来ています。

シュメール語エメサル方言で書かれたテキストは、この方言の多くの単語が標準語(エメギル)の対応するものと異なって発音されるため、通常の文字で書くことができず、音節文字で書かれることが多くあります。たとえば、エメサルの ka-na-áĝ はエメギルの kalam

《国》、エメサルの u-mu-un はエメギル en《主人》を意味します。また、時折音節的に書かれた標準シュメール語テキストに出会いますが、これらは通常はエラムの首都スーサ（イラン）や、メソポタミア北部のバグダード近くにあったシャドゥップム（現代のテルハルマル）など、辺境地域からのみ発掘されています。

音節記号は、適切な発音を示すために、多価記号の注釈としてときどき使用されます。私たちは通常、限定符と同じように注釈を上付き文字で èn ba-na-tar^{ar}）《彼は質問されました》のように翻字します。初期に生まれた注釈が、ある語の標準的な書き方の一部として固定化されることは滅多にありませんでした。最良の例は、「耳、知性」の言葉です。これは ĝeštug という語ですが三つの異なる方法で記述でき、そのうち二つは完全な注釈を取り入れています。

1) PI

2) $^{\text{geš-túg}}$PI

3) ^{geš}PI^{túg}

限定符

限定符は、語の前または後に表記される表語文字で、対象の語のカテゴリをさまざまに示します。それらはあくまで書き言葉の補助であり、おそらく実際に話されるときは発音されませんでした。それらは原シュメール語時代の終わりごろに散発的に使用され始めました。おそらく、読者が多価記号の望ましい音価を選択できるように生まれたものですが、表語文字が多価でない場合でも、しばしば義務的に使用されます。たとえば、木製の限定符 ĝiš は、PA《枝》記号の前に使用

されることで、sìg《たたく》ではなく、ĝidri《杖》と読むことを示すのに役立ちますが、ĝiš は他に読み方のない hašhur《林檎の木》にも付け加えられていました。他には読者が同音異義語を区別できるようにも使われました。ad《音》と ^{giš}ad《板》または単語の似た意味での別の読み、たとえば nú《横になる、寝る》と ^{giš}ĝèšnu(NÚ)《ベッド》を区別するために使われました。次の限定符は、対象となる単語の**前に**配置されるため前置限定符と呼ばれます。
pre-determinitive

限定符	意味	カテゴリ
1（略称 m)	一つ、(物品)	個人名（通常は男性）
lú	男性、人	多くの男性の職業
munus（略称 f）	女性	女性の個人名と職業[1)]
diĝir（略称 d）	神	神
dug	鍋	容器
gi	葦	葦の品種や葦製の物品
ĝiš	木	木、および木製の物品
i_7（または íd）	水路	運河と川
kuš	皮、革	皮と革製品
mul	星	惑星、星、星座
na_4	石	石と石製品
šim	香り、樹脂	樹脂、香料
túg（または tu_9）	衣服	（毛織物の）衣服
ú	草	草、ハーブ、穀物
iri	市	都市名（以前は uru と読みました）
uruda	銅	銅、青銅、銅製品（urudu,urud とも）
uzu	肉	肉体の一部、切った肉

次の限定符は、対象となる単語の**後に**配置されるため、後置限定符 (post-determinitive) と呼ばれます。

限定符	意味	カテゴリ
ki	場所	都市およびそのほかの地名
ku_6	魚	魚、両生類、甲殻類
mušen	鳥	鳥、虫、そのほかの羽を持つ生き物
nisi(g)	植物	野菜[2]
zabar	青銅	青銅製品[3]

シュメール語の語根の長い発音と短い発音

子音で終わる多くのシュメール語の名詞および動詞の語根は、語根に何らかの母音要素が続かない場合、つまり単語の複合語の末尾や名詞連鎖の末尾、または子音の接尾辞が続く場合に子音をドロップします。たとえば、「良い子」という簡単なフレーズは dumu-du_{10} と書かれており、実際には/dumu du/と発音されたと思われます。ただし、能格の接尾辞-e を追加すると、同じフレーズが/dumu duge/と発音されます。シュメールの書記が形容詞のドロップされた子音を「拾い上げ」、母音と結びつけて dumu-du_{10}-ge と表現しているため、私たちはこの発音を知ることができています。この隠された子音をドイツ語の述語、語末音 (Auslaut) にならって、形容詞 du_{10} には/g/ の語末音があります」というような言い方をします。現代の記号リストは、語末音の有無にかかわらず、そのような記号に音価を割り当てます。したがって、各

1) シュタインケラー [27] によればシュメール語のテキストでは使われておらず、後世にアッカド語で作られたもの
2) sar《植木》と読むことは廃れたが最近でも見られる
3) 多くの場合、前置決定詞 uruda と同時に付記される

記号に「長い」音価と「短い」音価の両方を与えます。

dùg, du_{10} 《良い》　kudr, ku_5 《切る》

dug_4、du_{11} 《行う》 níĝ、nì 《事》

gudr、gu_4 《牡牛》　$šag_4$、šà 《心、インテリア》

古い学術文献では、一般的にどこでも長い音価が使用されていました。したがって、「良い子が」というフレーズは、dumu-dùg-ge に翻字されたでしょう。しかしこれでは読者にとって子音が実際に重なっているように見えてしまいます。実際、アッシリア学の初期から知られているシュメールの支配者、神々、都市の多くの名前は子音が重なる形で読まれており、実際のシュメール語の発音を反映していません。たとえば女神イナンナ (Inanna) は本来はイナナ (Inana) に、メスアンネパッダ王 (Mesannepadda) は本来はメサネパダ (Mesanepada) となります。第二次世界大戦後、シュメール学者は、短い音価を使うことで翻字を実際の発音に近づけるようになりました。このやり方は今でも多くの学者に支持されていますが、いくらかの古シュメール期の専門家の間では長い音価へ回帰する傾向もあるようです。古バビロニアの書記学校で教えられていたのが短い音価だったことは、前エア の記号リストからわかります [20]。最終的にはすべての記号について長い音価と短い音価の両方を学ぶことになるでしょうが、最初は du_{10}(g)、ku_5(dr) などのように、短い音価とその語末音を学ぶだけで十分です。

Proto-Ea

見えない語末音があることでシュメール語の記号や単語を覚えることを難しいと思うなら、正書法のルールは一つの大きな手助けになるでしょう。最後の子音が次の音節記号で拾い上げられているとき、それが多価記号の正しい読みに関する良い指標になります。たとえば、

KA-ga と書かれていれば ka-ga《口の中で》または du_{11}-ga《行った》のいずれかですし、KA-ma なら inim-ma《言葉の》であることがわかります。

他にこれと似たような現象がみられるとすれば、不要な子音の重なりでしょう。たとえば、mu + n + a + n +šúm《彼は彼にそれを与えた》と分析される動詞連鎖には、mu-na-an-šúm と mu-un-na-an-šúm の両方で書かれたものが見つかっています。 同様に an + a《天で》というフレーズは、an-a または an-na と書くことができます。このような冗長な記述もまた、多価記号の正しい読みの助けとなります。AN-na は an-na《空で》と、AN-re は diĝir-re《神によって》としか読めないからです。

書記の方向

現在、古バビロニア期の終わり（紀元前 1600 年）から前 1200 年にかけて、記号の読み書きに変化があったと考えられています。もっと早く、紀元前 2500 年にはその起こりがあったと考える学者もいます。

古代の象形文字のテキストでは縦書きの行の上から下に記号が書かれており、各記号で表される物体の絵は、普通に読める向きで描かれていました。紀元前 1200 年には標識は一貫して横書きで左から右に書かれるようになり、記号の向きは 90 度反時計回りに回転しました。

ラバなどの記号リストによれば、古代からウル第三王朝まで、また碑文においては古バビロニア期のハンムラピの法典碑（BC1750 年ごろ）でも、元の方向を明確に示しています。現代では、古代のシュメール語コーパスを形成する紀元前三千年紀中期から二千年紀前期に対しては時代が合わないとしても、ごく初期のものを除き一貫して横書きで出版することが慣例となっています。この現象について、くわ

しくはS・ピッキオーニの「楔形文字の書記方向：理論と証拠」[34]、M・パウエルの”楔形文字の歴史における三つの問題：起源・書字方向・識字」[35] およびオンラインで公開されている M・フィッツジェラルドの「pisan dub-ba と楔形文字の方向」[15] を参照してください。

IV. 楔形文字を読む

要約すると、特定のシュメール語の記号には次の 3 種類の用途があります。

1）**通常、それぞれ異なる発音を持つ一つ以上の語を意味します。**英語の単語が複数の意味を持つように、単一の音価で複数の意味を持つ場合もあります。シュメール人は、比較的限られた語彙の中で人間の経験を表現しています。特定のシュメール語が持つ意味と、異なる単語を持つ現代の言語の概念を適切にすり合わせるためには、その感覚を研ぎ澄ませるための努力を続けなければなりません。

2）**記号の表す語の一つは、決定詞として機能する場合があります。**

3）**一つ以上の語の音価が音節文字として機能する場合があります。**たとえば、記号 AN は次を表すことができます。

《空、天》を意味する表語文字

《高域》を意味する表語文字

《(天の神）アン》を意味する表語文字

diĝir 《神、女神》を意味する表語文字

^{d}en-líl 《エンリル神》のように、神の決定詞 (^{d})

mu-na-an-šúm 《彼は彼に与えた》で使われるような音節文字 an

lugal-am$_6$《彼は王様》で使われるような古いシュメール語での音節文字 am$_6$

覚えていて

脱落しやすい語末音を持つ語は、母音が続かない場合、最後の子音を落とす。
a m i s s i b l e a u s l a u t

第 2 課　音韻論

シュメール語の発音について知られていることのほとんどはアッカド語の音声体系というフィルタを通って今日に遺されたものです。そしてアッカド語の音声体系自体も、他のよく知られているセム語の音素体系との比較によって定められたものにすぎません。

会話における語の意味を区別する音の最小単位を音素(phoneme)といいます。音素は音声(phone)または似た音声（異音(allophone)）の集合からなります。たとえば英語の場合、bit と pit のような発音で区別される二つの語があることで、/b/と/p/は別々の音素と言えるわけです。ある音素にはいくつかの異なる発音（異音、音声実現）を持つ場合もありますが、その言語の話者には「同じ音」として認識されます。たとえば、通常の会話の速度で話されるときの英語の ten と city の/t/音は異なっています。City では、スペイン語で pero と発音するときの r に少し似た、はじき音の [r] になるのです。すべての言語には、一定数の母音と子音の音素があり、これらをまとめて独自の音素目録(phonemic inventory)を構成しています。音素表記はスラッシュ/b/で示され、音声表記は角括弧 [b] で示されます。

アッカド語の書記学校では、シュメール語の記号や語がどのように発音されるべきかを音節的に綴った記号リストと辞書を作成していました。アッカド語の音素目録に存在しない音についても、アッカド語

話者が聞いて理解したとおり可能な限り正確に綴られています。これら音節文字で綴られた語はシュメール語の発音体系を理解する基礎になりますが、本質的にはシュメール語の語彙のアッカド人による発音にすぎません。

たとえば、/b/と/p/、または/d/と/t/、そして/g/と/k/として転写される音は、本来は英語のような有声と無声の対立ではなく、[p] と [p^h] のような 帯 気 (aspiration) の有無による対立であった可能性があります。帯気音（有気音とも）とは、音の後に小さな息の流れがあることを指します。また 有声 (voicing) とは、声帯の振動があることを指します。英語での/b/は有声で、/p/は無声です。英語とは異なり、フランス語やオランダ語での無声閉鎖子音は無気になります。

アッカド語は英語と同様に、おそらく有声無声の対立のみを弁別しており、アッカド語話者がシュメール語の音を区別するときも有声音と無声音で表現していたはずですが、私たちのシュメール語の音韻表記は、シュメール語の実際の発音を推測したものでしかありません。

母音（§4-15）

間違いなくあったと言える母音は、/a/、/e/、/i/、/u/です。幾人かの学者、特に S・リーバーマンは/o/音素の存在を仮定していますが、一般には受け入れられていません。

これら四つの標準母音が実際にどのように聞こえていたかは決してわかりませんが、スペイン語やドイツ語のように、おおよそヨーロッパ風に発音するのが慣例となっています。英語を話す人は、英語風の長い (アルファベットの) 発音を使わないでください。/a/は day や bat ではなく father のように、/e/は she ではなく play または pet の

よう に、/i/は lie ではなく tree または tip のように/u/は use ではなく who や hood のように発音してください。

シュメール語には、/aw/や/oy/などの真の 二重母音 (diphtong) 音素はないようです。しかし、/w/や/y/の 半母音 (semivowel) が母音間をわたっていた形跡が見られます。mu-e-a-áĝ と書かれた語は/m(u)weyaĝ/と発音されていたはずです。Ur III および OB のテキストで ba-an-√を ba-e-√や ba-a-√と、また in-√を ì-a-√と書いている背景には語根の前の/n/を表す/y/があるのかもしれません。

シュメール学者は、連続する母音をアポストロフィで区切って、`a-a-kal-la` と書かれた個人名を A'akala と書き写すことがあります。これは読みやすさのみを目的とした便宜上の慣習で、少なくともこの文脈においては、英語で I am とゆっくりはっきり発音した時に二つの単語の間で生じるような、喉の奥で生じる声門閉鎖音や声の途切れ、母音連続 (hiatus) がシュメール語に存在していたことを示しているわけではありません。

エッツァルト [10] 13f. は、語根内の母音の長短の存在を主張しています。より詳細な議論は E.J.M. スミスの著作 [26] を参照してください。母音の長さは、別の音の代わりを果たす、単なる異音的なものに過ぎないようです。おそらく古バビロニア時代以前には母音を延長して後続の/n/の欠落を補う 代償延長 (compensatory lengthening) が存在しました。したがって、Ur III のテキストでは、in-gi-in の代わりに in-gi-ì（おそらく鼻音化の有無によらず [ingiː] と発音する）と書かれているでしょう。（音声記号のコロン [ː] は先行する音を伸ばすことを示します）

母音要素の中には、特定の文法的かつ音韻的環境で規則的な変化を受けるものがあります。古シュメールのラガシュの動詞接頭辞の i/e 母音調和 (vowel harmony) のパターンについては、トムセン [13]§7 を参照してくださ

い。全時代を通じて、先行する音の影響を受ける 順 行 同 化 と、後続する音の影響を受ける 逆 行 同 化 の両方がよく見られます。
progressive assimilation
regressive assimilation

トムセンの母音の「 縮 約 」（§14f.）に関する議論は不十分です。彼女が説明する現象は、厳密かつ包括的に研究されたものではなく、縮約よりも母音の置換または削除としたほうがうまく説明できます。特定の同化、脱落、および削除現象は、この文法書を通して出会うことになりますので、個別に説明します。
contraction

子音（§16-30）

シュメール語の子音音素は、通常次のように表されます。

閉鎖音・鼻音		有声	無声	鼻音	調音不明
	唇音	b	p	m	
	歯音	d	t	n	dr
	軟口蓋音	g	k	ĝ	
	声門音		(ʔ)		
摩擦音	歯音	z	s		
	硬口蓋音		š		
	軟口蓋音		h (IPA では x)		
	声門音		(H) (IPA では h)		
流音	l l_2 r				

閉鎖音

閉鎖音は、空気の流れの妨害または閉鎖を特徴とする子音です。先に述べたように、シュメール人の閉鎖音はもともと、有声と無声ではなく、有気と無気の対立を特徴としていたかもしれません。この対比
stop

が同じシュメール語に対して複数のアッカド語の綴りがある原因であり、現代の学問はアッカド語の語彙資料に大きく基づいているため、学生は現在のシュメール語の文学においても翻字のバリエーションに遭遇することになります。学術書では、たとえば、名詞《杭》は gag と kak の両方で、または動詞《広がる》は bar と par の両方で綴られています。シュタインケラー [32] は、「シュメール語の語根の最終音には（従来翻字されているような）無声子音が来ることはなかった」と主張しています。(cf. MAD2[16]) したがって、ありうる最終音は/b d g/のみであり、/p t k/ではありません。たとえば、少なくとも古いシュメール語のテキストでは、kak ではなく gag と読むべきということになります。この（異音の？）規則は、後の時代に厳密に観察されることはなく、一般にシュメール学の文献にも反映されていません。

音素/dr/

現在、ほとんどの学者は、/dr/または/d^r/または/ř/と綴られる音素の存在を受け入れています。エッツァルト [10] §18f. は代わりに/r̂/を提案しています。発音はまだ不明です。最初は二重調音の閉鎖音であると考えられていました。より最近では、ヤン・ジー [37] が「この都市の名前 [アダブ、より適切な発音は/ud^{r}ubu/の綴りにおける/s/の存在は——特にシュメール外（エブラとウガリト）のテキストにおいて——おそらく、子音/*dr/が（そり舌の？）摩擦音であり、これらの領域では/s/と、少なくとも/r/や/d/よりは/s/に近いと知覚されたことを示す。」としています。ヤーゲルスマは、彼の新しい文法書 [18] の §3.3.2 で、破擦音 [ts^h] を主張します。彼が無気無声の [ts] と主張する音素/z/の有気版だとしています。ブラック [4] は、/dr/に関する以前の学者の見解を要約し、その文章の結論として「母音間の/-d-/

の/-r-/への変化（ロータシズム rhotacism）の過程、または異音の交替 alternation の形跡かもしれない」、「[d] でも [r] でもない『余分な』音を想定する必要はない」としています。シュメール語の正書法の特殊な用法から、語末音として/dr/を持つ語が数十語ほど見つかっています。/dr/で終わる単語が母音/a/や/e/で発音される接尾辞を取る場合、/dr/とそれに続く/a/または/e/の組み合わせは DU 記号で記述され、それぞれ `rá` または $\texttt{re}_6$ と読まれます。したがって、{`gudr + a(k)`}《牡牛の》は `gud-rá` と、{`gudr + e`}《牡牛によって》は $\texttt{gud-re}_6$ と記述されます。（実際の音素が/dr/ならば、本来は DU 記号を `drá` または $\texttt{dre}_6$ と表記すべきですが、通例としては `rá` と $\texttt{re}_6$ で書かれます）古バビロニアの書記学校のテキストにおいて、アッカド語話者の書記はこの音素を単純に/d/音か、または場合によっては/r/音として表記していました。

/dr/音素が語頭・語中で生ずる可能性もありますが、現時点では、それを確実に識別する明確な方法はありません。語頭の/dr/の候補には、`dù`/`rú` の異形を持つ dù《建てる》や、$\texttt{de(g)}_5$/`ri(g)`《落ちる、落ちた》、$\texttt{du}_7$/$\texttt{ru}_5$《押す、角で突く》といった語があります。シュタインケラー [28][29] を参照してください。

軟口蓋鼻音 /ĝ/

英語の sing のような軟口蓋鼻音 [ŋ] は、現代のワードプロセッサの文字セットに存在する複合文字である、キャレット（^）記号でキャップされた/ĝ/として翻字されることがほとんどです。より理想的なのは、チルダ（〜）記号でキャップされた/g̃/です。ただし、この文字は一般に活字の書籍や雑誌、または Notabene Lingua などの言語指向のアカデミックワードプロセッシングプログラムでのみ利用で

きます。[1)]

アッカド語の音声システムにはこの音素が含まれていなかったため、アッカド語のテキストでは、シュメール語の記号や語を、通常は/g/で、または/n/や/m/で、ときには/ng/または/mg/を使って綴られました。そのため、音素/ĝ/の存在が推測されたのはほんの数十年前のことで、シュメール学者が鼻音/ĝ/と閉鎖音/g/を区別するため ĝ を使用しはじめたのもごく最近のことです。この習慣はまだ普及しきっておらず、例えば、アッカド語学者によっては balaĝ《ハープ》や saĝ《頭》を単に balag や sag と書いていることがよくあります。/ĝ/を含むことが現在知られているいくつかのシュメール語では、音素も/n/または/m/として転写されていることがあります。たとえば、kíĝ《働く》、huĝ《貸す》、alaĝ《像》といった語はいまだに記号リストを含む現在の出版物でも kin、hun、alam という表記が一般的です。ただし kíg や、もっとよい形の kíĝ が最近見られ始めています。中間の/ĝ/はいくつかの語では ng または mg の形で書かれることがあります。最も顕著なのは、diĝir《神》を dingir、そして niĝir《使者》を nimgir と書くことです。シュメール語を学習する場合、限られた ASCII 文字セットのみを使用する文献やインターネット出版物で出会う古いスペルに関係なく、この音素を含むすべての単語を正しく発音できるようにすることが重要です。/ĝ/はシュメール語の一般的な音素であり、単語のどの位置でも発生する可能性があることが明らかになりました。英語では、この音は語の中間や末尾の位置においてのみ生じるため、ĝá-e《私》や ĝuruš《大人の男》のようにこの音から始まる語をスムーズに発音するには多少の練習が必要です。

---

1) 訳注: 現在ではユニコードに含まれているため、一般のコンピュータでもこのチルダ付きの ĝ を表現可能です。ただし本書では原著にあわせ ĝ を使用します。

最終位置に/ĝ/が存在することは、単語の後に接尾辞/a/または/e/が続く場合に最も明確に見られます。このシュメール語の正書法では記号 ĜÁ を使用して/ĝ/とそれに続く母音で構成される音節を記述します。母音が/a/の場合、記号 ĜÁ は音/ĝa/を表し、ĝá として翻字します。母音が/e/の場合、記号は同じですが、翻字は ĝe$_{26}$ となります。分詞{bùluĝ+ a}《育った》は bùluĝ-ĝá と書くのに対し、不定詞{bùluĝ+ e + d + e}《育成》は bùluĝ-ĝe$_{26}$-dè と書くわけです。記号価 ĝe$_{26}$ が使われるようになったのは比較的最近ですので、古い文献では、文脈と無関係に記号価 ĝá のみを見ることになるでしょう。エメサル方言ではまれに ĝe$_{8}$(NE) が使われます。

音節/ĝu/を表記するためにシュメール人が記号 MU を使用したことがわかったため、現在の学者は軟口蓋鼻音が要求されるところではこの記号を ĝu$_{10}$ として翻字します。残念なことに、最新のシュメール語学術文献を除けば、頻出する一人称単数の所有代名詞-ĝu$_{10}$《私の》は-mu と書かれたままです。よって生徒は記号の古い扱いに注意し、正しい値を慎重に判断して、適切に発音する必要があります。たとえば、mu は《名前》ですが、MU-MU と書かれた《私の名前》は mu-ĝu$_{10}$ が正しい読みです。ややこしいことに、所有代名詞として-mu を使うことが実際には間違いでない場合があります。《私の》という語はシュメール語の標準語であるエメギル方言では /ĝu/ですが、シュメール語の典礼テキストでも使用される、いわゆる女性言葉であるエメサル方言では/mu/なのです。

先頭に音節/ĝi/または/ĝe/を含む単語を綴るために、シュメール人は MI 記号を使用しました。そのため ĝi$_{6}$ および ĝe$_{6}$ が割り当てられています。音節/aĝ/、/eĝ/または/iĝ/を含む単語は ÁĜ の記号を使って綴られ、現在は áĝ とともに値 èĝ および iĝ が与えられています。

音節/uĝ/の場合、使用される記号は UN で、値は ùĝ です。したがって、たとえば、エメギル方言の語/halam/《消し去る》に相当するエメサル方言は/ĝeleĝ/と発音され、後者は通常 ĝe$_{16}$-le-èĝ として音節的に書き出されました。音素/ĝ/を含む記号の綴り方の概要については p157 の音節文字表を参照してください。

摩擦音

一般的にはシュメール語の/s/や/z/は英語のそれと同様の発音とされていますが、現在ヤーゲルスマは/z/を無気破擦音 [ts] として説明しています。音素/š/は、英語の wish の sh にあたる音です。

摩擦音(friactive)は、通気が口内や声道と摩擦することによって生じる音を指します。歯擦音(sibilant)とは、口の前部から中央で生成される摩擦音で、s や f のようなシューという音がします。軟口蓋摩擦音(velarfriactive)や咽頭摩擦音(glottalfriactive)は口または喉のさらに奥で発生します。破擦音(affiricate)は、[ts] や [dz] のような閉鎖音と摩擦音との組み合わせです。

シュメール語学術文献で通常/h/として翻字される音素は、ドイツ語の doch での ch にあたる音、つまり無声軟口蓋摩擦音 [x] です。この字はアッカド語の出版物では、通常、/ḫ/のようにブレーブアクセントが下に付いた h として表記されますが、少なくとも現在のところはシュメール語において英語の house の [h] のような無声声門摩擦音は認められていませんので、本書のようなシュメール語単独の文脈ではアクセントを省略して差し支えありません。ただし、エッツァルト [10]（pp.19-20）は、ある種の声門「障壁」音素、おそらく/H/として記述される真の [h] が存在する場合について構築を試みました。アッティンガーと他の数名は声門閉鎖音 [ʔ] として説明しています。ヤーゲルスマの文法書 [18] では、声門閉鎖音をシュメール語の重要な音素

として [h] と [ʔ] の両方を受け入れています。

流音

流音 (liquid) の正確な発音は不確かです。/r/音素は、スペイン語の perro または pero のように、ふるえ音やはじき音の可能性があります。また、ドイツ語またはフランス語で見られるように、有声軟口蓋摩擦音[2)]の可能性もあります。英語の/r/のような R 音性母音 (retroflexvowel) ではなく子音であることは確かです。

シュメール語には 2 種類の/l/音素があった可能性があります。主要な/l/音素はおそらく英語とほぼ同じように発音されたと見られますが、それも仮定にすぎません。世界の言語にはいくつかのタイプの 側面接近音 (lateralresonant) も見られます。これまでのところ、2 番目の/l/音素の形跡はわずかな語の語末でのみ見つかっています。本当に存在するとしても、実際の発音の手がかりはほとんどありませんが、その存在は{`líl+ a(k)`}《空気》を `líl-lá` と書くように、後に/a/母音が続く場合に記号 `LA` ではなく `LÁ` が使われるケースがあることで示唆されています。この 2 番目の/l/音素にはまだ独自の発音区別符号がありません。この音素の発生はごくまれで、主に `líl`《空気》、`gibil`《新しい》、`pel`《損なう》、$\texttt{di}_4\texttt{(l)-di}_4\texttt{(l)-lá/la}$ 《小さなもの、子供》(`*tur-tur-ra` の特殊な 異綴 (variant))、およびおそらく `ul`、`túl`、$\texttt{dul/dul}_4$、そしていくつかの未証明の語根に限られます。なお `é-ki-tuš-akkil-ìa(NI)-ni`（Gudea 75 rev.1）または `lá(LAL)-a`《余剰》といった記述の存在からは口蓋化した [l^y] 音素も提案されています。

---

2)　訳注: 原文で voiced velar fricative のため有声軟口蓋摩擦音と訳しましたが、文意からは有声口蓋垂摩擦音 (voiceduvularfricative) の間違いと思われます

lú とその古い名詞接頭辞である nu-、lagal と nagal《宰相》のように、特定の単語における/l/および/n/の（語源的）変形について注意してください。lum または núm と読むことができる LUM 記号を比較します。吉川 [38] は 2 番めの/l/音素の存在を疑う論考を著しています。ヤーゲルスマ [18] もこの音素の存在を否定しています。

強勢に関わる現象

1969 年のクレヒャーの論文 [21] 以来、シュメール語における強勢（stress）とその語構造への影響に関するさらなる研究は、ほとんど行われていません。強勢に関連しうるシュメール語の発音変化は、語頭音消失（aphaeresis）、語中音消失（syncope）、語末音消失（apocope）です。ù-sún《野生の牛》に対する sún、または ù-tu(d)《出産する》に対する tu(d) のような変種について比較してみましょう。重複語（reduplicated word）の中の音が脱落する例としては、形容詞 dág-dág《純粋な》が dadag となったり zalag-zalag《輝く》が zazalag となることが挙げられます。シュタインケラー [31] は、ソルバーガーに続き、長く ùz と読まれ、現在では後続する-da の記号を説明するため ud_5 と読まれている《ヤギ》の語の正しい発音について素晴らしい解決策を再確認しました。この単語の長い形式は/uzud/として理解できます。これに母音が続くと/uzd/になります。例えば{uzud + a}が/uzuda/、そして/uzda/となり、ùz-da として記述されたのです。母音が続かない場合、/uzud/は/uz/と短縮されることがあり、そこから標準記号価 ŪZ が得られます。したがって、前エアの語彙目録 875 行目に記録されていることから OB 時代の書記学校の標準的な読みとみなされているものの、ud_5 の値は厳密には必要ないといえましょう。同様の例として、一般的に kalag-ga と書かれる形容詞《強い》があります。おそらくこれは{kalag + a}の語中音が脱

落した/kalga/として理解した方がいいでしょう。この場合、本来は kal-ga と翻字すべきです。少し異なる例ですが、sumun/sun《古い》、súmun/sún《野牛》、sumur/súr《怒り》、nimin/nin_5《40》、umuš/$uš_4$《理解》、tumu/tu_{15}《風》などの記号価のペアで、母音間の鼻音が脱落する現象が見られます。このような音脱落の現象は、その一部は強勢パターンによるものの可能性もありますが、シュメール語では、従来の表記法によって信じられてきたものよりもはるかに広範囲に及ぶ可能性があります。

覚えていて

人称ジェンダーカテゴリーは、単数であれ複数であれ、個人として見られる人物を指す。

非人称ジェンダーカテゴリーは、通常、集団として見られる人物、奴隷、動物、物事を指す。

第 3 課　名詞と形容詞

名詞と複合語

シュメール語で名詞に分類され、名詞連鎖（次項参照）の頭として機能する単語には、 dumu《子供、息子》、é《家、神殿》などの基本名詞 primary noun と、bar《外壁》、u_5《小屋》、ti《生活》、bùru《穴》、orba《割り当て》など動詞語根 verbalroot が名詞として使われているものがあります。主要名詞の数はあまり多くなく、以下のように複合語を形成することでいろいろな事物を表現しています。

1. 主要名詞を接続詞なしに並置してできた複合語。an-ki《天と地》, saĝ-men《頭頂部》, é-kur《山（であるところの）家》（ニップールのエンリル神の神殿）、ka-làl《蜂蜜の口》、an-úr《天の基部》＝《地平線》、an-šà《天の中心》、kalam-šà《国の内部》、é-šà《家の内部》、iri-bar《都市の外部》＝《郊外》、é-muhaldim《家の料理人》＝《台所》など。
2. 名詞と分詞を組み合わせた複合語。dub-sar《粘土板を書く人》、za-dim《石を細工する人》＝《宝石職人》、balaĝ-di《琴を奏でる人》、gu_4-gaz《牛を屠る人》、kisal-luḫ《中庭の掃除をする人》、ki-ùr《均す場所》＝テラス、ki-tuš《住む場所》＝住居、sa-pàr《広げる網》＝投網、ĝr-udu-úš《羊を捌くナイフ》、lú-éš-gíd

《縄を引く人》＝測量士、á-dah《腕を足す人》など。 その他、分詞についての最終課にもいくつかの例が出てきます。

3. 名詞と形容詞からなる複合語。é-gal《大きな家》＝《宮殿》、dub-sar-mah《書記長》、kù-sig$_{17}$《黄色の銀》＝《金》など。
4. 抽象化接頭辞 nam により派生した抽象名詞。nam-lugal《王権》、nam-maḫ《高 貴 さ》、nam-ti(l)《生》、nam-úš《死》、nam-dumu《(集団としての）子供たち》、nam-um-ma《(集団としての）老女(泣き女)》など。
   abstractingprefix
5. 生産的な成語要素 níĝ-《もの》や廃れた成語要素 nu-《人》(< lú）を用いた複合語。níĝ-gi-na《検証されたもの》＝《真実、法律》、níĝ-gig《苦いもの、冒涜》、níĝ-sa$_{10}$《買うもの》＝《値段》、nu-bànda《若い（主）人》＝《監督》、nu-kiri$_6$(-k)《果樹園の人》＝《果樹園管理人》、nu-èš(-k)《神殿の人》＝《神官》など。最後の二つは属格構文になっています。
   productiveformative　obsoleteformative
6. 本来は短いフレーズですが、 統語的には名詞として機能する言葉。名詞化された動詞形が固定化した i-du$_8$《彼は開けた》＝《門番》や in-dub-ba《彼が積み上げたもの》＝《境 界 盛 土》(シェーベリ [33] p.81 参照)、i-dub 《盛られていた》 ＝ 《穀倉》など。または、勧奨を表す動詞形が固定化した ga-ab-šúm《それをくれますように》＝《販売者》、gab-kaš$_4$《あれらを走らせますように》＝《御者》、gan-tuš 《私をここに住まわせますように》 ＝ 《店子》 などもあります。 また、gi-nindana(-k)《(長さ）1 ニンダンの葦》、orzà-mu(-k) は《年の端》＝《新年》といったような、属格句も一般的です。 職業名でも、lú-ur$_5$-ra(-k)《貸付の人》＝《債権者》、niĝir-sila(-k)《街頭の布告者》などのように、属格構文となるものが多くあります。固有名詞でも、
   demarcation mound

^{d}nin-ğir-su(-k)《ギルスの主（ラガシュの首都の守護男神)》のようなものがあります。

7. íl《キャリア、ポーター》のように、動詞の意味を持つ独立分詞を名詞(substantive)として使用するもの。

ジェンダー（§37）

シュメール語には、男性と女性という自然な性別とは関係のない、文法上の性別があります。名詞には、単数・複数を問わず、個々の人間を指す人称的(personal)なものと、通常は集団としての人間や、動物、場所、物を指す非人称的(impersonal)なものがあります。文法書によってはこれらを《有生(animate)》と《無生(inanimate)》と呼んでいますが、これは少々紛らわしいものです。なぜなら、非人称的なカテゴリーは、生命のない物体だけでなく、動物、人の集団、あるいは軽蔑的にモノ扱いして奴隷を呼ぶ場合のように、生命ある存在にも使用されるからです。

人称と非人称の区別は、主に、ある種の三人称代名詞の形、名詞の複数形の表示、および与格間接目的語の格表示において明らかにされています。この区別が維持されている代名詞パラダイムでは、ほとんどの場合、人称カテゴリーは子音要素/n/の存在によって示され、非人称カテゴリーは要素/b/によって示されます。 これらの要素の元々の違いは、直示詞(deixis)の一つであり、/n/は近称《これ》を、/b/は遠称《あれ》を表しています。

他の多くの言語と同様に、三人称の代名詞の形は、おそらく、指示詞(demonstrative)から発展したと考えられます。 シュメールの代名詞接尾辞-biは、所有代名詞(possesive pronoun)《それの、それらの》と指示詞(demonstrative)《これ、あ

れ》の両方の機能を持ち、指示代名詞-ne《これ》と独立指示代名詞 ne-e(n) は、所有接尾辞-(a)ni《彼の》に関連していることは確かであり、おそらく人称複数の位置・終止格(locative-terminative)動詞接中辞-ne-《彼らへの》と名詞人称複数標識-(e)ne にも関連しています。

数（§65-77）

シュメール語の名詞は、単数形、複数形、集合名詞(collective)（アイテムや個人をグループとして見たもの）のいずれかで理解されます。 しかし、シュメール語の構文は柔軟で、複数形標識(pluralmaker)が決まった場所に必ず現れるとは限りません。 文法的な関係を示す際に多くの冗長性があるため、例えば、主語がすでに動詞接辞によって複数形であることが示されている場合、明示的な複数形標識を主語から省略しても意味が失われることはありませんし、その逆もまた然りです。名詞に付けられる数の標識についてまとめると、下記のようになります。

標識なし

名詞は通常単数形ですが、複数形や集合名詞として理解されることもあります。その場合は、動詞や文脈から得られる情報によって明確になります。 名詞の中には、érin《労働者、軍隊》や ugnim《軍隊》のように、本質的に集合的なものもあります。 古シュメールのテキストでは、集合名詞は非常に一般的ですし、複数形もあります。《荷運び人の監督》という職業は ugula íl（集合名詞）と ugula íl-ne（複数形）のいずれでも書かれています。

重複された名詞

このような名詞は複数形で、その意味する概念はおそらく《すべての

個別の人や項目》に近いものでです。例えば en-en《すべての領主、それぞれの領主》。

重複された形容詞

diĝir gal-gal《すべての偉大な神々》のように、形容詞の重複が名詞の重複と同じ働きをすることがあります。このような形はおそらく、二重に重複された形 diĝir-gal diĝir-gal が省略されたものだと思われます。このような構造はまれですが存在することは確実です。

複数形接尾辞 -(e)ne

人称名詞の複数形のみを表す明示的な標識です（人称の性別を表す要素/n/を備えていることに注意してください)。動物や物にはつきません。 この接尾辞の基本形は単に-ne であったと思われ、-e-ne は先行する名詞が子音で終わる場合にのみ現れます。 このルールは古バビロニア時代になると崩れ、接尾辞の頭文字/n/を先行する子音から分離する必要がない場合でも、挿入母音/e/が現れることがあります。 したがって、lugal-e-ne《王》や dumu-ne《息子》は正しい書き方ですが、OB lú-ù-ne（< lú-e-ne）《人》は一般的ではあるものの、 過剰修正 (hypercorrect) による綴りです。(挿入母音は先行母音に同化することが多いです)。 古シュメール語ではその逆で、-e-ne を期待するところに-ne が現れることがあります。また、-(e)ne は複数形の重複に伴って発生することもあります。例えば、en-en-né-ne《すべての領主》、lugal-lugal-ne《すべての王》などです。

形容詞的接尾辞 -hi-a

《混ぜられた》という意味の過去分詞。 例えば、u_8 udu-hi-a《雌羊と雄羊の群れ》や anše-hi-a 《(年齢や性別の異なる）様々なロバ》のように、通常、動物や物の雑多な集まりや混合に使われます。

いくつかの例：

0. 0. 4 dabin àga-ús-ne gu$_4$-da ì-da-gu$_7$　　{**àga-ús+(e)ne**}

4(バン) の大麦粉を雄牛と 共(-da-)に 衛兵らが食べた。 (Nik I 130 1:1-3 OS) （《衛兵ら》は明示的に複数形で記述されている）

0. 0. 3 dabin àga-ús é-gal-la ì-gu$_7$

3(バン) の大麦粉を宮殿で(-a) 衛兵らが食べた。(Nik I 131 1:4-2:1 OS) (ここでは《衛兵ら》は集合名詞)

lú šuku dab$_5$-ba-ne

物資の配給を受けた男 (HSS 3, 2 1:2 OS)

冠詞

シュメール語には定冠詞 (the)、不定冠詞 (a) ともに存在しません。ですので、`lugal`《王》という語を《the king》、《a king》、あるいはただの《king》のいずれに訳すかは文脈によります。

形容詞 (§79-83)

形容詞の形

`gal`《大きい》、`tur`《小さい》、`mah`《大きい》、`ĝen`《普通》などの単純な形容詞は基本的な動詞の語根で、`iri gal`《大きい都市》、`dumu`

tur《小さい子供》のように名詞を修飾することができます。形としてはこれらは完了分詞 (perfective participles) です（最終課で説明します)。

別の一般的な形容詞としては、動詞の語幹に名詞化 (関係節化) 接辞 -a を使用して作る（過去）分詞形もあります。例えば、é dù-a《建てられた家》=《建築》のようにです。

形容詞の第 3 の形は、kalag-a《強い、強大な》のように-a という接尾辞を使用しているものの、過去分詞的な意味を持たず単純な形容詞として機能しているように見えるものです。この-a が本当に名詞化接尾辞-a と同一であるかどうかは、まだ未解決の問題です。

最後に、単純な形容詞にも-a が付くことがあります。ただし J. クレヒャーの主要な業績（[22], トムセン §80 参照）を経ても、通常-a が付く形容詞と付かない形容詞、例えば zi(d) と zi-da《正しい、誠実な》の間の意味の差異は明瞭ではありません。 例えば、lú du_{10}(g)《ある良い男》と lú du_{10}-ga《その良い男》のように、この違いが《限定性 (determination)》または《定性 (definiteness)》の多寡によるものである可能性は説得力をもって証明されてはいません。もし形容詞接尾辞-a が名詞化小辞 (nominalizing particle) -a と本当に同一であるならば、現在分詞の一種である単純な形容詞《良い人》と過去分詞 lú du_{10}-ga《良い人である/あった男》などの間の意味のわずかな違いによって、対比が成り立つのかもしれません。

tigi níĝ du_{10}(-ga) 構文

接尾辞-a のついた形容詞の問題に関連して、主要部名詞とそれを修飾する形容詞（全てではありませんが、しばしば-a 接尾辞を取る）の間に níĝ《もの》という語を用いる同格限定構文 (appositional attributive construction) があります。そのよい例が詩的表現 tigi níĝ du_{10}-ga《良いものであるティ

ギ讃歌》＝《良いティギ讃歌》です。以下は接尾辞-a をもつ形容詞語根と文体上の目的しかないと思われる níĝ を用いた三つの例です。四つめの例は通常、接尾辞-a を取る kalag で同じ構文を示しています。

dím-ma níĝ sa$_6$-ga {**sa$_6$(g)+a**}

優れた判断 (Šulgi B 10 Ur III)

ĝišbun níĝ du$_{10}$-ga mu-un-na-an-ni-ĝál {**du$_{10}$(g)+a**}

彼はそこで彼女のために立派な宴会を催した。(Iddin-Dagan A 204 OB)

asila níĝ húl-húl-la-šè {**húl+húl+a**}

とても幸せな喜びの中 (RIME 4.3.7.3 Sumerian 74 OB)

uruda níĝ kal-ga {**kal(a)g+a**}

強い銅 (銅と銀の論争詩 OB)

複数の形容詞

名詞は名詞連鎖の中で、-a で標示される分詞を含む複数の形容詞（または別の修飾語句）で修飾されることがあります。

anše tur mah

小さな、そして大きなロバたち (Nik I 203 iv 1 OS)

sá-du$_{11}$ kas gíg du$_{10}$-ga-kam {**du$_{10}$(g)+(a)+ak+am**}

それは良い黒い熊の供物だ

(lú) zu-a kal-la-ni {**zu+a kal+a+(a)ni**}

彼を知り親しかった（人たち）(ルガルバンダとエンメルカル 5 OB)

形容詞の重複

形容詞はしばしば重複（同じ語を繰り返すこと）されますが、この重複が形容詞の程度の強化を意味する場合と、修飾名詞の複数化を意味する場合があります。 したがって、diĝir gal-gal は普通は《偉大な神々》と読みますが、《非常に偉大な神》とも読めるのです。kal《貴重な》と kal-kal《非常に貴重な》、あるいは šen《清潔な》と šen-šen《非常に清潔、無垢な》のように、多くの普通の形容詞の重複は強さを示します。

まれに、普通なら níĝ kun sù-sù-da と書かれるであろうところを、péš ĝiš-gi níĝ kun sù kun sù-da《葦ネズミ、とても長い尾を持つもの》（ナンナの旅 275 OB）と書かれている文に出会うことがあります。 形容詞は基本的に動詞語根ですから、動詞の形でよく見られる語根の 複 数 重 複 (plural reduplication) は形容詞でも当然予想されます。 さらに複数形の過去分詞 de$_5$-de$_5$-ga’ 集められたもの（死んだ動物）’ や níĝ-gi-na《正しいこと、法律》{gi(n)+a}と níĝ-gi-na《すべての法律》（グデア像 B 7:38 Ur III）を参照してください。

いくつかのテクストの例

4 ninda-bàppir gal-gal 1 ninda-bàppir tur-tur

とても大きなビールパン 4 個、とても小さなビールパン 1 個（Genava 26, 53 3:2-3 OS）

一つのパンと明示することで意味を明確にしています。

1 gišù-suh$_5$ gal-gal

とても大きな松の枝 1 本 (VS 27, 44, 1:1 OS)

一つの枝と明示することで意味を明確にしています。

dim gal-gal ki-a mi-ni-si-si

たくさんの（またはとても）大きな係留杭を地に埋めた。(Gudea, Cyl A 22:11 Ur III)

動詞は複数重複を示していますが、形容詞は曖昧です。

2 mùd gaz-gaz-za {**gaz-gaz+a**}

砕かれた m-容器二つ (DP 488 2:2 OS)

複数重複か、《粉々に砕かれた》かは不明です。

シュメール語のように名詞語根や動詞語根が重複する言語では、色彩語も重複される傾向があります。シヴィル [7] (p155 n.32) の議論を参照。シュメール語の初期のテキストでは、いくつかの色を表す形容詞は明確に重複しています。例えば《白い》の語では、古シュメール時代 bar$_6$-bar$_6$ と書かれていたものが古バビロニア時代に babbar(BAR$_6$) と変化していてはいますが、音の重なりが

残っています。一方、《黒い》という言葉は、gíg gíg と重複して表記されることはほとんどなく、多くは gíg と書かれていましたが、これはおそらく常に giggi(GÍG) と読まれていたのでしょう。一般的な OB ku_{10} ku_{10}（または kúkku)）《暗い》と比較してみてください。他の色彩語は、後の時代では時々しか重ねられていません。例えば、si_{12}-si_{12}(SIG_7) に対して sig_7(-ga)《黄色の/緑色の》、gùn-gùn(-na) に対して gùn(-na)《多色の、まだら模様の》などです。 その他、色彩に関係しない単語でも ku_7-ku_7 《甘い》、dadag（< dág-dág)《純粋な》、zazalag（< zalag-zalag)《輝く、きれいな》などいくつかの例が見られます。

形容詞の翻字

かつては、形容詞は通常ハイフンで名詞に連結して翻字される傾向がありましたが、現代では、ハイフンを省略し形容詞を名詞とは別の単語として翻字する学者が増えています。どちらの表記法にも欠点があります。 形容詞を連結することで、名詞連鎖の構造が強調され、分析や翻訳に役立ちますが、不格好なほどに長く連結された連鎖はシュメール語の単語とは何かという概念を不明瞭にします。 この文法書の 2013 年改訂版では新しい慣例に従い、接尾辞 -a でマークされた過去分詞を含む形容詞は、重複された形容詞、複合名詞（一般的なものでも、その場限りのものでも)、固有名詞（人名、寺院名、地名など）の場合以外は、連結せずに翻字するものとしました。

覚えていて

適切な名詞連鎖の最後は普通、格標識で終わる！

名詞連鎖の部分は常に一定の順序で現れる。この順序をしっかりと覚えておくこと！

音節記号価表：V VC CV

同じ記号を持つ音節を連結して図示しています。

母音

a　i　e　u　ú
à　ì　ù　u_8

閉鎖音:CV

	有声	無声
唇音	ba　bi　bé　bu　bí	pa　pi　pe　pu
歯音	da　di　de　du　dé(NE)　dì　(d)rá　$(d)re_6$	ta　ti　te　tu
軟口蓋音	ga　gi　ge　gu　gé　gi_4　ge_4	ka　ki　ke　ku　ke_4

閉鎖音:VC

唇音	aB	iB　eB　íB　éB	uB
歯音	aD	iD　eD	uD
軟口蓋音	aG	iG　eG	uG

VCの記号では有声と無声の音価が区別されません。

B = b または p
D = d または t
G = g または k
Z = z または s

訳注:読者の便利のため、記号価に対応する字形を標示しました。ここで使用したフォントはNoto Sans Cuneiformで、ウル第三王朝期の字形をもとにしたものです。

摩擦音

歯音

sa　si　se　su　sú　zu　za　zi　ze　zé　aZ　iZ　eZ　uZ

硬口蓋音

ša　ši　še　šu　aš　iš　eš　uš　šé　éš

軟口蓋音

ha　hi　he　hu　hé　ah　ih　eh　uh

鼻音

na　ni　né　nu　ne/dé　an　in　en　un

ma　mi　me　mu　am　im　em　um　am　àm

gâ　gi$_{6}$　ge$_{26}$　gu$_{10}$　âg　ìg　èg　ùg

流音

la　li　le　lu　al　il　el　ul　lá　lí

ra　ri　re　mu　ar　ir　er　ur　rí　ré　ár　úr　rá　re$_{6}$

文献

[1] Attinger, Pascal (1993). Eléments de linguistique sumérienne: La construction de du11/e/di "dire". Fribourg, Switzerland / Göttingen, Germany: Editions Universitaires / Vandenhoeck & Ruprecht. https://doi.org/10.5167/uzh-139536

[2] C. Mittermayer & P. Attinger, Altbabylonische Zeichenliste der sumerisch-literarischen Texte, Fribourg, 2006

[3] R. Borger, Assyrisch-babylonische Zeichenliste, AOAT 33/33a, 1978-

[4] J. A. Black,THE ALLEGED "EXTRA" PHONEMES OF SUMERIAN,Revue d'Assyriologie et d'archéologie orientaleVol. 84, No. 2 (1990), pp. 107-118

[5] J. Black, "Sumerian Lexical Categories," ZeitschriftfürAssyriologie 92,2002

[6] CDLI contributors. 2023. "Abbreviations." Cuneiform Digital Library Initiative. November 28, 2023. https://cdli.mpiwg-berlin.mpg.de/abbreviations.

[7] Civil, M. 1987 "The early history of HAR-ra: the Ebla link", in Cagni, L. (ed.), Ebla 1975-1985, Dieci anni di. studi linguistici e filologici (Naples 1987), 131–58.

[8] Civil and R. D. Biggs, "Notes sur des textes sumeriens archaiques", RA, 60. (1966)

[9] G. Cunningham、"Sumerian Word Classes Reconsidered," Your Praise is Sweet:A Memorial Volume for Jeremy Black,London, 2010, pp41-52

[10] Dietz Otto Edzard, Sumerian Grammar Handbook of Oriental Studies. Section 1 The Near and Middle East, BRILL, 2003

[11] The Pennsylvania Sumerian Dictionary Project, 2017 http://oracc.org/epsd2

[12] D. Frayne, Royal Inscriptions of Mesopotamia, Early Periods 1 (2008) 95

[13] Marie-Louise Thomsen,The Sumerian Language: An Introduction to Its History and Grammatical Structure,Copenhagen Studies in Assyriology, Akademisk Forlag

[14] Foxvog, Daniel A. 2022. "Elementary Sumerian Glossary (Revised 2022)." Cuneiform Digital Library Preprints 2022 (3.1). https://cdli.mpiwg-berlin.mpg.de/articles/cdlp/3.1.

[15] M. Fitzgerald, "pisan dub-ba and the Direction of Cuneiform Script," CDLI Bulletin 2003:2

[16] I. J. Gelb,MAD 2. Old Akkadian Writing and Grammar,Chicago: University of Chicago Press, 1952, Second Edition

[17] Green, M. W. "The Eridu Lament." Journal of Cuneiform Studies, vol. 30, no. 3, 1978, pp. 127–67.

[18] Jagersma, Abraham Hendrik,A descriptive grammar of Sumerian,Faculty of the Humanities, Leiden University,2010

[19] F. Karahashi, "Relative Clauses in Sumerian Revisited. An Interpretation of lú and níĝ from a Syntactic Point of View," AV Jeremy Black (2010) 165-171.

[20] J. Klein & T. Sharlach,Zeitschrift für Assyriologie 97, 2007, 4 n. 16

[21] J.Krecher,Verschlusslaute und Betonung im Sumerischen," in AOAT 1 ,1969, 157ff

[22] J.Krecher,Orientalia 47 [Rome, 1978], 376-40

[23] R.Labat, Manuel d'Epigraphie akkadienn, 1948-

[24] G.Marchesi, "Lumma in the Onomasticon and Literature of Ancient Mesopotamia."History of the Ancient Near East / Studies 2006.

[25] Y.Rosengarten, Répertoire commenté des signes présargoniques sumériens de Lagaš, 1967

[26] Eric J. M. Smith,Harmony and the Vowel Inventory of Sumerian,Journal of Cuneiform Studies 59, 2007, 19-38

[27] P. Steinkeller, Orientalia 51, Rome, 1982, pp358

[28] P.Steinkeller,Journal of Cuneiform Studies 35, 1983, 249f

[29] P.Steinkeller,Journal of Near Eastern Studies 46,1987,56 n.5

[30] Steinkeller, Piotr. 1989. Sale Documents of the Ur-III-Period. Vol. 17. Freiburger Altorientalische Studien. Stuttgart: Franz Steiner.

[31] P.Steinkeller,Third-Millennium Texts in the Iraq Museum ,1992, 47

[32] P.Steinkeller,ZeitschriftfürAssyriologie 71, 2001, 27

[33] Å.Sjöberg, "Beitrage zum sumerischen Worterbuch," Orientalia 39, 1970

[34] S. Picchioni, "The Direction of Cuneiform Writing: Theory and Evidence," Studi Orientali e Linguistici 2, 1984-85, 11-26

[35] M. Powell, "Three Problems in the History of Cuneiform Writing: Origins, Direction of Script, Literacy," in Visible Language XV/4, 1981, 419-440

[36] Rubio, Gonzalo. "46 Sumerian Morphology" In Morphologies of Asia and Africa edited by Alan S. Kaye, 1342-1394. University Park, USA: Penn State University Press, 2007. https://doi.org/10.1515/9781575065663-049

[37] Yang Zhi,The Name of the City Adab,Journal of Ancient Civilizations 2,Institute for the History of Ancient Civilizations

[38] Yoshikawa,Mamoru,Acta Sumerologica 12,1990

[39] Volk, Konrad 1997. A Sumerian Reader. Rome: Pontificio Istituto Biblico.

索引

A

abstracting prefix/抽象化接頭辞 42
affiricate/破擦音 37
allophone/異音 29
alternation/交替 34
animate/有生 43
aphaeresis/語頭音消失 39
apocope/語末音消失 39
appositional attributive construction/同格限定構文 47
aspiration/帯気 30
attributive/修飾語句 48
Auslaut/語末音 24

B

biarticulated stop/二重調音の閉鎖音 33

C

collective/集合名詞 44
compensatory lengthening/代償延長 31
contraction/縮約 32

D

definiteness/定性 47
deixis/直示詞 43
demarcation mound/境界盛土 42
demonstrative/指示詞 43
determination/限定性 47
determinitive/限定符 18
diphtong/二重母音 31

F

friactive/摩擦音 37

G

glottal friactive/咽頭摩擦音 37

H

head noun/主要部名詞 6
hiatus/母音連続 31
hypercorrect/過剰修正 45

I

ideogram/表意文字 11
impersonal/非人称的 43
inanimate/無生 43

L

lateral resonant/側面接近音 38
ligature/合字 8

liquid/流音 38
locative-terminative/位置・終止格 44
logogram/表語文字 11

N

nominalizing particle/名詞化小辞 47

O

obsolete formative/廃れた成語要素 42

P

perfective participles/完了分詞 47
personal/人称的 43
phoneme/音素 29
phonemic inventory/音素目録 29
phone/音声 29
pictogram/象形文字 11
plural maker/複数形標識 44
plural reduplication/複数重複 49
polyvalency/多価 18
possesive pronoun/所有代名詞 43
post-determinitive/後置限定符 24
pre-determinitive/前置限定符 23
primary noun/基本名詞 41
productive formative/生産的な成語要素 42
progressive assimilation/順行同化 32
Proto-Ea/前エア 25

R

reduplicated word/重複語 39
regressive assimilation/逆行同化 32
retroflex vowel/R 音性母音 38
rhotacism/ロータシズム 34

S

semivowel/半母音 31
sibilant/歯擦音 37
sign/記号 1
stop/閉鎖音 32
stress/強勢 39
substantive/名詞 43
syncope/語中音消失 39

V

variant/異綴 38
velar friactive/軟口蓋摩擦音 37
verbal adjective/動形容詞 7
verbal chain/動詞連鎖 6
verbal root/動詞語根 41
voiced uvular fricative/有声口蓋垂摩擦音 38
voicing/有声 30
vowel harmony/母音調和 31

シュメール語文法入門 Vol1

2023 年 12 月 2 日　初版
2023 年 12 月 3 日　誤記訂正
2024 年 3 月 10 日　改訂
著　者　ダニエル・A・フォックスヴォグ
翻　訳　ゆー (uyum)
協　力　hinoya

This work is adapted from ”Introduction to Sumerian Grammar” by Daniel A Foxvog, used under CC BY 4.0.
Licensed under CC BY 4.0 by uyum.